

氏名	山口 有梨沙				
学位の種類	博士（文学）				
学位記番号	博甲第10167号				
学位授与年月日	令和4年3月25日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	Kimono Circulates: Sartorial Japonisme and the Experience of Kimonos in Britain 1865-1914 (循環する着物——1865年から1914年のイギリスにおける服飾の ジャポニズムと着物の経験)				
主査	筑波大学	教授	博士（文学）	山口 恵里子	
副査	筑波大学	教授	博士（文学）	中田 元子	
副査	筑波大学	教授	博士（レトリック）	対馬 美千子	
副査	筑波大学	准教授	博士（芸術学）	林 みちこ	
副査	立命館大学	教授		金山 亮太	

論文の要旨

本論文は、1865年から1914年までのイギリスにおいて日本の着物が **kimono** として受容されるようになる過程でイギリスの美術、服飾、文学、演劇、大衆文化等に与えた影響を詳かにするとともに、着物がイギリスの上中流階級および労働者階級の日常的な経験にまで及ぼした作用を追究したものである。19世紀以降の欧米でみられたジャポニズムにおいて日本の着物が西欧の高級ファッションに顕著な影響をもたらしたことについては先行研究があるが、本論文は着物が服飾のみならず、イギリス文化や日常性、そして労働者階級の生活にも影響を与えていたことに着目するとともに、「着物の経験」、すなわち着物が人々や社会に促した多様な経験にも考察を深め、「モノ」である着物がイギリスの文化・社会や身体イメージ、日常生活にも変容をもたらしたエージェンシー（効力）を明らかにすることを目的としている。論文の構成は以下の通りである。

Introduction

Part One: Kimono in Drawing Room

Chapter 1 Kimono in Paintings

Chapter 2 Victorian 'Japonisme in Fashion': The Tea Gown Trend

Part Two: Kimono in Theatre

Chapter 3 Moving Image: Hybrid Fantasies

Chapter 4 Experiencing Japanese Kimono in West End Theatres

Part Three: Kimono in Circulation

Chapter 5 Adoption of Kimono-Shaped Gowns

Chapter 6 Kimonos within Popular Culture

Chapter 7 Circulating Bodies in Kimonos: Japonisme of the Masses

Conclusion

序論では研究目的、研究背景、先行研究、本論文の立場、本論文の構成が述べられる。第1部では1860年

代以降に画家が描いた着物やそのサークルで着用された着物が論じられる。第1章では、1860～90年代にD. G. ロセッティ、J. M. ホイッスラーらが描いた着物が取り上げられ、エキゾチックな装飾品として挿入された着物がモデルの身体の動きを映し出す「着る衣」として、さらにエロティシズムを放つ「脱ぐ衣」として描かれるようになる過程が追跡される。第2章では1870～90年代に上中流階級の女性が着用した「日本風ティーガウン」の発生と、唯美主義芸術の影響下で推進された衣服改革運動との関わりが示される。着物が、身体を拘束しない古代ギリシアの衣装と関連づけられ、女性の健康にとって必要な「すべての変化をまっとうな方向に導く」力をもつ衣服として受容されたこと、また地方新聞の記事等の調査からこうした着物の効力が地方でも認識されていたことが明らかにされている。第2部で論じられるのは、劇場や日本人村で着用された「見世物」としての着物である。第3章では、1882年に地方都市バースで開催された日本のバザーでイギリス人女性が着用した着物風衣装と、1885年にロンドンで開設された日本人村で日本人女性が身につけた素朴な着物が比較される。前者では「ファンタジーとしての日本」、後者では「古い日本」が呈示されたが、両者とも近代化したイギリスが喪失したものをノスタルジックに演出していたことが示される。第4章では、コミック・オペラ『ミカド』(1885)とミュージカル『ゲイシャ』(1896)および『白菊』(1905)の舞台衣装として用いられた着物について論じられる。『ミカド』では「日本人」を演じたイギリス人俳優が日本製の生地とヨーロッパの生地を継ぎ接いだ着物を着用したこと、日本を舞台にしてイギリス海軍の男性とイギリス人女性との恋愛を描出した『ゲイシャ』と『白菊』ではヒロインがイギリスの道徳から逃れるために着物を着用しゲイシャへと変身したことが考察される。この考察から、着物がストーリーに応じて自在に「翻訳」されたこと、そして着物がイギリス人に変身の可能性を開いたことが指摘される。第3部は大衆の日常に浸透した着物を論じている。第5章では、筆者がイギリス各地の博物館や個人が所蔵する着物を調査したデータを踏まえ、20世紀に日英両国で大量生産された着物や着物風ガウンが上中流階級から労働者階級にまで普及した過程が明らかにされている。その過程で高価で重量のある着物と安価で軽い着物の着用時のシルエットの相違が示され、後者の着物が「着脱の間」にある衣服といった新しい感覚を着用者にもたらしたことが論じられる。第6章では、仮装や異性装に用いられた着物がイギリス人のアイデンティティの揺らぎを表出し、ジェンダーを攪乱する効力をもったことが考察される。この効力は日本人の身体イメージにも作用し、日本人一座が西洋人向け着物風ガウンを舞台上で脱いで露わにした生身の身体が「新しい日本」のイメージを創出し、「古い日本」のイメージを刷新したことが明らかにされている。第7章では、筆者による膨大なポストカードの調査により、20世紀初頭に日本の着物や生活を写したポストカードが大衆のコミュニケーションツールになったことが示される。送り手がそれらのポストカード上にメッセージを書き加えてパーソナライズし、受取手はそのイメージに自身の解釈を加えていたことが示され、ポストカードを介したコミュニケーションにおいてイギリスの人々が自由に我有化した日本のイメージが階級・性別・地域を超えて循環していたことが明らかにされている。

結論では本研究の成果がまとめられるとともに、今後の展望について述べられる。本論文では1865～1914年のイギリスにおける「着物の経験」を追跡することによって、異国の衣服だった着物がイギリス人の身体の動きを表す衣として絵画に描かれるようになり、また俳優の変身や仮装・異性装の衣装ともなってイギリス人の自己表現の手立てとなり、さらに労働者階級に至るまでの日常生活にも多様な仕方で効力を及ぼしたことが明らかにされた。本研究は、身体的、日常的経験といったミクロレベルでの日本イメージの侵入のありようを明らかにし、ジャポニズム研究に新たな地平を開くものであるとしている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、日本の着物が1865～1914年のイギリスの美術や文学、演劇、大衆文化に浸透することによりイギリスの新しい芸術文化表現を生みつつ、労働者階級も含むイギリス人の身体イメージや日常生活をも変容さ

せた過程を詳かにしたきわめて意欲的な研究である。その過程は、着物を見る、着物を描く、着物を脱ぎ着する、着物をイギリス風ファッションに応用する、着物で変身する、さらには着物が写ったポストカードを送るといった着物をめぐる多様な「着物の経験」を通して、いかにして着物のエージェンシー（効力）がイギリスの文化や社会、日常性、人々の身体に作用したのかという独創的な問いを追跡するなかで明らかにされている。このような探究は、筆者が、物質文化研究のアプローチを応用してイギリス各地の博物館や個人が所蔵する実際に着用された着物の縫製方法や製造過程、重量等を丹念に調査した結果、可能になったものでもある。従来のジャポニズム研究では主として日本の芸術デザインが西洋芸術や日本表象に与えた影響を追究しており、服飾研究でも着物が高級ファッションに与えたデザイン上の影響を検証することに主眼を置いてきた。したがってイギリス人の着物をめぐる日常的な経験、ましてや労働者階級の日常生活を視野に入れたジャポニズム研究はほとんど存在していない。本論文は、日常の美学研究の動向も踏まえて着物とイギリス人の日常的な経験との関連を考察し、ジャポニズム論、オリエンタリズム論に新しい境地を開いた画期的な研究といえる。先行研究では、着物を用いた絵画や演劇、服飾において幻想化された日本イメージが追究されることが多かったが、本論文は、その表現が一方的な西洋側の日本表象といったパターンにおさまるものではなく、むしろその幻想によってイギリス社会や身体イメージを変容させる効力を着物がもち得たことを論じている。下層階級に流通した安価で軽い着物は「着脱の間」の衣をイギリス人の日常を生きる身体にもたらし、ポストカード上の着物は日本のイメージを自在に我有化する媒体となり、着物による仮装や異性装はイギリス人のアイデンティティやジェンダーを攪乱する可能性をもつに至ったことなど、本論文が示す新しい知見は着物の効力を示すとともに、ジャポニズム研究をイギリスの社会文化研究に接続し、双方の研究を飛躍的に発展させたといえる。

このように着物をめぐる経験について斬新な議論が展開されているものの、一方で理論的考察に関する論述や一つ一つの事象における論述が不足している箇所もある。また、1865～1914年という時代の背景や、自他表象とも関連する、着物が促した身体の解放の問題についてのさらなる考察も必要である。例えば、ポストカードには着物を着た子供たちが写されていることを踏まえると、19世紀後半以降のイギリスの子供イメージと日本表象との関連についての考察も新たな課題として浮かび上がる。このように本論文には解決すべき課題はあるものの、これらの課題については、今後、筆者が研究を深化させるなかでより発展させる形で追究し、新たな研究成果を生むものとなることが十分に期待できる。

以上のように、本論文が明らかにした新しい知見は学界に対する大きな貢献であり、本研究の成果は優れたものであると高く評価できる。

2 最終試験

令和4年1月17日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。